

松濤だより別冊

第十五号

東京佐賀県人会発行の「東京と佐賀」(年4回発行)のヤングやんぐコーナーに掲載された学生の記事を紹介します。

令和三年陽春号

「東京と佐賀」

松濤学舎

小野 赳

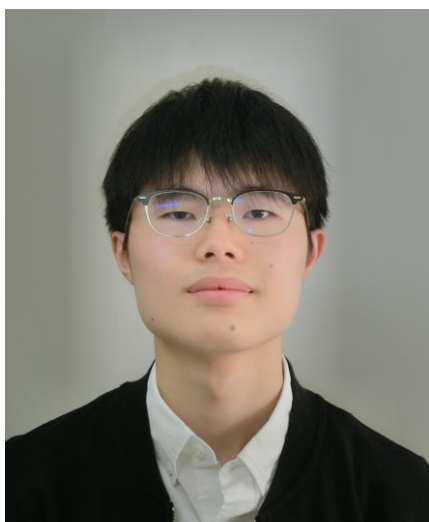
筆者のプロフィール

出身地 多摩市

出身校 弘学館高等学校

大学 東京大学

工学部応用化学科4年



自分が大学進学に伴って上京してからおよそ三年が経った。上京した際に感じた、東京や松濤学舎という未知なる環境への不安や心細さを今でもありありと思い出すことができる。記憶の鮮明さからは、ついこの間、東京にやって来た気がする。一方で、この約三年間で自分が行ってきた学業や課外活動を振り返ると、それなりの時間が経過していることも確かにわかる。

電車はまるで巨大な生き物のようで、定刻通りに人々を飲み込み走る。そのような表現を何かで読んだ記憶があるが、まさしくその通りだった。東京に来て如実に感じたことは、月並みではあるが、東京は人が多いということだ。人が多い分だけ、競争は必然的に激しくなる。大学にて優れた素質や能力を持つ人々に触れ、自信を失ったり、自分に対して疑問を投げかけたりすることもあつ

た。自分は、将来的に化学という領域に携わった仕事をしたいと考えていたが、自身の展望について不安を覚えることもあつた。しかしながら、自問自答の結果、やはり自分は化学が好きなので、自分に能力があるか否かはわからないが、この道を進むしかないと考えてようになった。

話は変わるが、自分は美術館を訪れるのが好きだ。中高で美術を教えてくれた恩師は、東京のことを「本物も偽物も多い街」と言っていた。東京は日本の中枢であるため、展覧会等が最も行われやすく、渡来する作品も多い。それゆえ、東京では日本の他のどの場所よりも価値の真贋を問わず様々な作品を見ることができるといえる。しかし額面通りの意味だろう。しかしながら、おそらく恩師は暗に人間もそうだよ、と伝えたかったのではないかと思っている。自分は本物なのか、それとも

偽物なのだろうか？ 残念ながら、現時点では後者だろう。それでは、これからの自分は本物になることができるのだろうか？ 未来のことは一切わからない。しかしながら、自分が本物になることができるにしろ、あるいは偽物であり続けるにしろ、努力を続ける他ないと考えている。大学の人々や、松濤学舎の人々と交流していくなかで、そのことだけは漠然と、しかしながら強く予感するようになった。東京という場に来て数年生活する機会を頂いたからこそ、自身の未来は自身で切り拓くしかないのだと、ある程度の覚悟を持つことができただのではないかと考えている。

令和三年盛夏号

「東京のトリセツ」 (地方限定)

松濤学舎

鳥取 靖也

筆者のプロフィール

出身地 福岡県久留米市

出身校 弘学館高等学校

大学 早稲田大学

先進理工学部

応用物理学科4年



私が上京して早くも4年目に突入し、人生の夏休みと言われる大学生活も終盤を迎えている。新型コロナウイルスの影響で2年にわたり、大学生らしい生活を過ごせずにいるが、松濤学舎の学生とは密な時間を共有できていると感じている。

「東京と佐賀」の執筆にあたり、故郷と東京という観点から出身の福岡と東京について、将来の暮らしや環境などを主観的ではあるが比較していこうと思う。

東京の第一印象は、「東京にはいろんな奴がおるなー!!!」その中で多くの人と関わり、様々な思考や価値観に接して共感や刺激を受けながら、これまで白紙だった自分の人生感が少しずつ具現化して来ていると感じる。東京の暮らしは学生にとって最適な環境であると思う。私は大学ばかりでなく生活全般において人付き合いや人脈づくりに尽力してきた。

特にアルバイトとして4年間続けているテニスコーチではテニスの指導を通して様々な年齢層の方と関わることで高めることができたと感じている。

だが、働く場所や家庭生活の場として東京を考えた時に、通勤電車をはじめとした人の多さに減入ってしまう姿を思い描いてしまう。

それに対して生まれ育ってこれまでほとんどを過ごしてきた福岡は住みやすさこの上ない。(地元という先入観がそうさせているかも知れないが笑)人の多さも最適、自慢できるグルメ、都会と自然のメリハリのきいた環境など挙げるときりが無い。もはや地理的問題がなければ福岡が日本の中心のほうがいいのではないのかとも・・・思ったりする??
まとめると、自身の人生の過

程で、東京で過ごした時間は必要で、大切なものであるということ。人の数が多い分いろんな人と関わるができる機会も得られる。日本の心臓である東京をもっと知ることが重要であると思う。私は中学・高校・大学と「寮」という閉鎖的空間(良いところも無限大にある)で過ごしてきたが、一歩外に出ることで自分自身の価値観が覆されることも実感してきた。幅広い環境に挑戦し、そこで身を持って学び、経験したことを地元に戻元することがベストなのではないか。これが、私が今考える東京の「トリセツ」である。

若いうちに東京で過ごすことを経験できた環境に感謝している。九州をはじめ地方出身の高校生には東京に進学することを強くお勧めする。